山玄井

中村俊定文庫
文庫 18
46
5

年中月ごとの発句

正月大

季吟 扣

元日かきそめや萬歳のそんとうちいれ

長頭丸彩色を作りて。

元日にもくまりをけるうりつみ乃日待ふ

おりて花をれらうぐ

をのひ行し

ちとせや世をすわ元俳諧宛

三月 立春成るくるよ屠蘇を

ちこ行く

酒ぐわとりちいはたちはつ春

祇園にちかづくこひと
乃社まくく
歌学世八上達しめよわが為
ちづさ言いろべゆく八破魔矢乃
六月 花かりくく若葉乃やえ
吉乃やえ乃れいこうひ
ちりすかすて七月
吉乃ゆ毎をふりて
けるに
雪野八相生すべきなぎやうか
ら歌てくさや祝ふ八ら葉
かつ乃ぶれもや唐紙ろうぎれ
いろ八色こいと染ぬ

一封にあやすぐ吉乃ふまろ
ひけの坐ぬむもや野原指のろ
ものはまて毎乃やをえ若葉
七月 白るれせちを
吉れ乃人乃白るやセれかあけ
山ざくやいを正月門吉雲
ぬやいまくるて祈そゆ安すく
十日 子乃日あろけるろ
やといひて小松の根をもひきあか
うあれ子百乃声やいろ松
くよみやんことふなれ
ちろうにやるいやるり行
に琴をかなるあして

きてやいうあとはてること
はてしうしく
亜乃まへよりちらぬることはなのひか
ひとうぬハ香毒乃ちれ梅むかし
十二日　西乃めりけるこり
ちらそれ盛をかるやあもふる狐
ちくれをのぐ所や春乃色乃梅
十四日　ひる人小瓶短尺あまるこ
をこせてことせし
弟う句とくもかなほ春
てらといひうりくれし
大瓶やわけてくん氣ちかすこ
かうへてやひあ乃扇ちれ石巖

仙洞乃ハ清庵と號ハ名
人よ乃をせたまひ
けるに付
山西乃きあひうえんまど乃梅
鶯ハ咲どとくちれ乃もし
やあやきれきあ黄金乃肌ふぐ
地獄ちれも梵やそやま乃
かうな狼ハ蛇乃かしらけりやあ
乳盆山ノ石
涼さやこそまぬきするあがし
をこにわをあけりあう月乃白毫
ひのもれ中やくれて音ちと夜の月
ゆこまくく庭のおおやひのくう海

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十五日 大道寺

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十六日 氏神へまゐる。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

岩柳ゆるくや風のちらすらん
咲ぬとそ人は思ふ梅の花
籠に留る乃かをりれく
うぐひすなれかをやあせこに墨衣香
うぐひすにたくせを
あくるやうぐひすなむ初ねこ
喪ゐ人うとれるをとよ
らひにまりうれ家
ふ留乃柳うき鳴
けるを
うぐひすも柳ぬやとうきやう
ぬ人とそもやをろとこれ梅
こゝるかゝへ伽羅の燒々梅の花

二月小

朝月 名所乃留といふうを
うぐひすとそれ彩端やたゝ海ゐ
やきめるふゆつゝやいとをす鶯
柳をこれぬねとゆひこゝれ月
を絶といふ人身海ゐ
ける中塩ゐ
花ひはゐもとう中ゐれ旅の人
音ゐにうゐやかれこゐ
文字ゐくゐ年ゐ紙とかつる屋
とれゆく沢色乃ゐやをとれ
彩留やをとりて海に留こ
わさがりいひちをこぎをうまゐ

十日 梅のちるやうふこのひまに鶯たづ
ねれちりかゝるゆ。
こゝろあに仰くてりるゐど
人のめぐ花なりける
よ二つゞひぐうとひ
きこうられい
蔵梅のきらくに来やて来ひ
ゐ梅と連理のえるこう枯ら
枝よ添くく始をこれう
し人のとゝへ
詩の作を切磯うやりむつゞき
むう実うとゝどゐくむほゞゐち
書うれをゝゐせよ志じそく淫謀稼

ちらかハのこされひよ
ことうゝれを
ゐをとゐハ鶯ゐんやゐるこう此花
こゝはうく紙ハのいれかうゐ
見花をこれはうこうれよゐ氏紙
うゝまや人ゐこうべのわまうる
ゐひかゐうゝ今をこれわまかる
人のとゝとうう一こと紙
梅ををけるう
子重ゐなおひやひとゐ氏ゐう梅
池田正式私れいるゝ
ふうう。二巻酒う
上京して津とめく

大和に侍りしとき、いとるとをとめ、おとこけう者堂せきをどもなどかすこもや角とも玄蕃面家の、氣さうこれ面まるかゆ、ゆかぬをかゆえうぶをやつこにをしをとかりし大像ととにりぶをうくれく

廿五日 ひづかるやかうり強生姓さうら人とお法しし梅の木信よ。けるうりぎまりも餐白れおうりゆりうば

というりうれく

むをこりいそんびんひあう梅の枝いあをくやむれいのちりつぶ枝むい飛情ひらくや玄念むさう玄

梅乃まにるをほかな

垂さるどうて

ぎやくるもつるぐや物のあさうら入てをうんうわぬとんと家ちて

三月大

ひく桃やあきまと乃全えんめ

物いううち丸乎乃巻乃さこ

三日 をくのさけといふ

三白

桃乃酒ゞこうふくゝみこうれんそ
うとのしやらく梅の桃乃酒
とゝ成けつきこもうへいゞ小

四日

海堂よ菓を味ふるや除花物
人乃ことにこうゝ乃ゝと
ゝ乃をゝゝとつきまけ
てゝ乃盛るを乃て
ゝさきやゝゝゝ乃もゝ乃れ
やゝゝゝれさうやうも金ゝ山
花よまゝゝてゝゝや風風桐ゝゝ

八日

ゝゝゝゝゝゝゝゝ乃ゝ人ゝ
いゝゝ出て雪猫火
ゝゝゝうつゝゝゝ乃ゝゝ

ゝけうゝ乃ゝ乃ゝ数なゝ
ぬ塩ねゝゝゝ乃ゝ乃ゝ
わけゝれゝ。近く東山
乃かゝゝゝゝをひなつれ。
きくゝうゝゝ葛餅
をねうゝうゝゝゝゝゝ世
ゝもうて付めきなゝう。
ゝるゝゝゝゝゝゝひゝゝゝ
ゝくぬ乃なゝうゝ長
乃ゝく忘紙ゝぬやう
ゝゝんゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝ独ゝゝゝひゝゝぬ
一僕ゝゝくゝゝゝゝゝゝ

新墨谷ゆうしの末乃
揚歳ある條に短冊
数多行くうつ。これハ詩
をわりうるもの所
そくせきや新白ろこの紙ろ
吉田乃文れ。ありこう。
社家やしん人あをとよ
花ゆれくすかりち入ぬ。
をむ物ようこと知う。
えうをつきれたつし
ひえれえぶ武うやとこまん
かこうこ乃えひる人
まや。てせれ山陰う

まくそう。せて酒のむ。
かさかなよ忘にうふ
をきこゑ。世きう邪
酔て春ひとうすめ
あしんやしそでつち
めが勝よつけるをう
うんひつうえそやく
かろえよかとう。洋
ろうう紙乃竜も紙
をたし
兼好あやうぶきう竜
山ハまくじ乃弘う。
罵江れ神も仏すう。

梅ハ白みにうりく。
香爐峯の雪をとゝ
ざむべしかゝれ義景
り見とれてゆゝん
るを忘れ果るに。
うゝ赤芝居うう
箔をうゝ者て義一樹
の陰れ涼をぐめゝと
いひ出れ是ハさやうれ
こやびたる為りを
ゝ作ゝ法幼先作へ水も
いゝへてよりうをつゝね
りゝめを所やるる

硯箱やうれ和乃みさ
りゝぐぐわいれ書な
ひゝりにゝさきわ乃え
ゆゝあ命ゆゝをせをこ
せうりゝ所ゝでもち
かゝんをされゝるれゝ
わゝり火うち袋り。
清者ゝけといれゝず
へゝれ杉未をあれど。
をこゝりハけるれを
一ゝ和文香深き袋。
ゝざとかゝつぐゝ梅
ゝて春ゝ

むかしの鼻にあてたきものを
知らぬ人はなかりしぶ
さんかれごとにうよ
かきをゆくさし。
をもしさをあるわく
をもしくいと仮な
くんぷ文人れかのよ
遠へられぐいの乃
うちふれくつぶやな
はくうちぬ桜林寺よ
見かうとやりを
中当たりおれを
まへ乃こなくり多

素多に糸ざくや竹
やう色所る猪鹿る人を
見乃くあくねくや
くそくちるくく
見くそ糸をくを業
南猿る乃ちくます。
多ようれは師ち。
せくを人形乃れ
をげるくへうぬの
くへ荷物ーきるを
ひきけるう
かもがねよくふをあくび
といひけれてだて

ものゝ後ろにゐんやと
てゝ大なる松おろせる
ほとりにかつらし。
こゝまるうり蓮花
門弘ありまはべるを
所よわひしれる人を。
奇しくせうこいえ
かがゝかれはいでに
ざふそおかいせさせ
まれくけさるん京
へまろうつるといふ。
を家乃くるうり
小橋とやちなぶれ

うりうこゝありけ家
もれこふ鹿ケけてあ
ふるんちをふざんん
や宝光を而とうち
うれふきゝ所ゝ
りり。三中乃社れ方
まるもぐぐちひをゆ
らちいちふるひこれを
をひきつゝれんさせ
ゆへ。吾ゆ殺いとうく
仙ゆゝそ。まれもに
ゝりまてゆを家
こぶてゝゆをむがちあれと

さしんする者乃ちさ
やとりん所ありぬとゆ
なる者してぬ乃ち
風ハ寒うそといふく。
こまるさ毎ものある
とれよりたりんぬ史の
柳勝たをやかり
毎めしくぬとを
ハ楊き花乃様をけを
さくべくくりえうり。
いなる所人ハおがを
かるまやとぬ。か
ぐこめうあり。

やうる所ぬぐうきか
ぬるくしたやうた
を乃十人だうり。堂
げあどつをを
ぬをぬ乃かを
あをを乃りてまぶ
らいくさうくろこから
されどあるきさる
ぬいをしまやひや芽
法師がぬぬぐきをん
とう先をあかうろく
一筆近くるりよ
くりぬやおりかせ

あきさいづらあど
いつもやどらうれハ
わどくきこゑおいか
乃ちうらやとくへ
生ぢんやまし
ぢめたつきうやかへう
智恩院まして
こゑうれもやさんふこし
きやうざうのちうく
ハ。普賢象まやうく
りさうう
こゑかもふハ。普賢象
長示るうりハはこ物

御戸ひらきおうまを
ゆく。もの乃時ふぐく責
賤雑集を
ゑくくやゑ乃緒のちやうし
祇園乃ほお乗まして
松原をうれて一そるる
揺ちうた栄さう
蘆風を病ぬ猿民乃ふさもや
出乃そこずます舞。乃の
たうしほうり神れう
ちゑハ。茅屋ふく
めたつくりて雲栄
をへそ多少乃接蘆

煙霞乃うちにたてこう。
そ双林寺ハ乃かく
やどれきき歌ん人く
ゆとりしてあるり。八坂の
塔ハかの乃あたりかゆかか
をのらりてそれ世
まぢかくうるき名のこ
せし法とうやすして
ちりうゑ乃むころかひ。
いくんを中くあり。
ひいつゞ乃雪ふうし
約。ひる法ゆ乃会に
まうれとして。一嚢子

とゝるひはゝ近くる
へきをを。奥ま乃ゞ
てゆくまゞへうし
をひるくうれ乃を
とあるとくんなゞ俳
りいまくと芭
みぢるやなとある真むら雪
ゑある大坂りいき
ありひくれく。彼寮り
ひきいまて相月け
られきい。まれかと
ゆがうえきせうむ
ををきうゑあとく

をりくられたるさくらぎて
もるまきのうち
ひねるハむを微笑一枝ゆ
ひとやうくさかう
てられ出る乃うちの
梦ゝやぶれかよゑぐ
きゐくり清みまて
とゆへん靈山りを
のりくで
むをたひやま風やぶ
と音きこえ〳〵独
ごち塔ゝ又ゝつを
ぬこやを乃塔ゝう

とぐろきの搖れこか
たるぶ。たぐり柳ハ
淡ぐりこきむ田
深ゝ。あこ木乃花ハ
擂檀葉射る匂ひをん
あつゝ。又ゝか
さくむ乃都。華蓋
らるものぞくうの作り
乃下つをつを
るへて花乃をるび
ゝゝ。ゆくりなく
久ゝられ而まこそう
りを来くん

んちぐする
やさらやや見れるを乃上
むろをとりてこきち
らんしられのかうれ
吉羽乃影うりくな
あひさ物もぐるて
むろ乃影もかくかるやせんしい
寝らるんやう番れ蔵裏
花鑓むりろ家をか
らそひてちるさへる
花雅男女衆にいまし
ゆきたかれついはち
遊くうんとちくれ

かくりのみまれを月衆
くけよ家にかりぬ
九日乃天余会ふかなれや花交
十日 やまうひ花乃祭り
ゆくとそ
むくさ然おぐやさず色さぐ松
撫花ちきさりし夜
知うにり入行く
清ひちやつくと色花の波
うぐちさ会ちるを桜や
とよの国よりかりく
久さり
まひとやとうを色と色乃衆

揚がりせしと長月
九行く
やうきの花の人爰うまれかの
うりやすき花や爰へれわる山
清水人なりたゆめて
爰はや花を庵のかちぶし
る野うり出る人京
よれほりうる後吉行
竹よ揚をいそてをうり
ちぶうきてうやれ蕎麦屋
ちるかのうめぐきぶれうり柳
風わしぶやうかうむの庭
中風やむえぶきるかまいうち

春の日や若わかられ新法師
いおうれまうと後
賀茂祭りいさなり動く
はしりん行りうる河
余和ふ国奥さんれつ上ル
角ちうやむてさられおうう揚
平仲すさ花あさうるれかい
揚のえうをを人のとと
ようぶ名まとそぶよ
これるをうふ
うるれ動やあぶおうを
花のこころ春宮すうの
るれうふひあよ霊山人

まうでて。園上人乃伊
勢目乗乃御起をと
ゆりけるわゞ殿方
出くるれと。京より豆
あをれにつるくし
くりこまうるひまに
人く俄殺せらるゝ
あゞそもはてゝ人々騒
伊勢日乗宮乃間を
くりしてかへさり。
やうしれまく
高菊や素かいやもしが袷小松
廿八日 庭より人々つしめ

さう人くうるを
一をもやきこもゞ出ぬ
ムをもれ水ゞ面ふれやはいさう
廿九日 女乃ムりす御乃像わ
うるをとえんぢしてい
戚夫人をやとうんかいやるな
嘲るいとかきそやはいかをれうへ
卯月小
ひちゞへきうや春と家ゞ繁
霊ゆそ関ゆ紙とゆ
歌まく。酒をこゆもへい
ゆをゆ乃ムるう
ゆりそ嘲や菜芝れゆ

八日

曹

十六日　こぬでらに晃子母祈
かくしやうれうの
これくのみちびいそ
をきて。まもらんきん
まつりうるありがた
をうら　樗のゆらく
ふ氣色ごとこけるを
樗さくたゆるやせんぐん
ふ字ノ鄰ちとらくのうを
をとうに夏ぜるうふ紙
ゆ蛍このむひ男ぞやせぼ師
ゆる色や鈴鳴るそやみ
東ふまてふ紙みやく

きくうるといつるよ
やゆぶこはきてをきくや郭公
不如帰やゆ花嶽をすこう時雨
樗やひのの人ぬそでかぐろ
こやひ一ひのうれへのうちも
花を詠よ作てかぐんゝふ
竹のふふ氣ゆるれや東坡法
こうんうや勝無ぬとぎふ海ふ
ゆとき雨やうに牡丹郭公
白ふ色紫わとともれおく郭
蔭涼よまりけるよ。
人乃庭の樗ぬ乃ふ
ふたやぐれ咲るをんて

緣緣乃志やぐ行くせんだん孫孫

五月大

朝日　かきはらふこうとえむもむあり
志ゝ乃茅ぬむよをうきいかびい
いつくを生たちねるやきうとさう
毎ゝきぐうり降た
ゝゝふ僕乃ゝたや先
ふきこふとりゝく
毎にゝくふ茅ゝ蛍ゝれやつこふ

五日　菖蒲五日

ちゝぶれやあやゝれゝる毎中ね
ゆゝりゝと生れてゝべも茅ゝ蛍ふ
根食ゝたんゝゝたやゝき

ひきゝゝふ彩乃ゝまでゝ紙茅ゝぶふ
菖蒲乃ゝ世るやゝども孫びさ
茅茅乃ゝくゝる孫ん
にゝりゝけるにゝつり
をぐれてゝもやゝゝれゝ
あぢゝくゝふ金銀茅ゝる乳

六日　衣近茅や岩ゝ紙茅ゝぶゝて茅ゝ

七日　あをゝうぢまつりゝ
ぎんぐりとやいひて
ゝあれるすゝりとゝれハ
茅茅りきぐぐく宇乃蛍ふ
やゝる火てかゝ茅て乃ゝや言すれ
蛍火やひ折ゝ茅りてあぐゝむ

たまぶれいたづらんざのやまぶし
ヒう竹の志ぐるる時やたちぶれ

上二首　探幽よ當ものとうて
実夫なれや月うかれとぶやうに
わ涙たうとぶやをあれのしも
冠りやわ原ぶとぶきぶ
十音　いまこそや沖山よりふてて
山ぶてぬ板本業をる社煙ふ
きてびを庭りうん
うけるにわう猫の
まくらひしられ
あのてひ其そけ方ふ弘
かをが所やをうひさ弘也庵子

うれのあかすすこのふ筆ぶと
うせをうしいをとと
を弟行とそ
きてうひあ武鼎や青函
義法ありけるへり
うあてあひて義白
あとをうとうを行るよ。
國ふわ新とうあるを
きてて文ぼうと
ろる奥よ。かるとりう
いうとうるども
みるさとれもとひぐ
さまやあとうるみく

いとあはさうなるのちれいあり
なるうんれいなりなるやうなる
ぬしのあやめとりてくく
酢よりれ桑れくぬるやうさ
あいの月のまるやうれ車ゆり
うし罷もいひくへ車越り
廿五　きるる鄙ちりやうぐく
けるよ。毎めり三所ぐ。
わどれく時ちうれハ
梅の毎もちれや月屯り往天
桑ちそあくかまりにやの関
光ちりいの雲れるでやるれ
連立する人れ庵りり。

ぬぢさいろいつきけ毎紙
りくく
連立て牧懐紙四ちれれの庵
三井るるすて
名桑ちれ元ぬ色れれ
夕れ元ぬれくれの
時れれ
八竜寺義ちれはれ
六月小
廿日　ひむろやまにりやうれ地獄谷
ちぢめく　つまむく
うる人れうをとにあ
をふく出ちれハ

あらはえて雨をとゞめし飾の葦
壺巾に鳴やまぬ蝶や花京磬
本丸に向る門せき八継母小
酒の池となるやらづ風てふこり
あつさをとをみねがらや虫籠の皮

七日 祇園会すれく
人は見ども力かどんきがむ
まくれ花や見舞ぬんこた
申すほ中ぶ寄てやかこまつり
菊ちこゝちごかざる花見ん余ぶ
月ほこれ見んの春や四五てん
二こそりこをとてもゝやせ敬行
五月にもひくや祇園の会や無い

八日 江府志形乃そらにを
あれ世る露もとよりこ風の還
君子ら薫ぶるる花乃そふ
白蓮やひらくと每朝見とん法師
いふみれをおそやさん花乃見れ
かうれ見やひまくとも文
十四日 乃ちれ祇園会りしを
紅粉の行れく
五ぶをワれ八毎夜鶴そふ
あせみにふちと躍るせみや
十六日 常んる丸しにまゐりて
赤完会やみぐひまた十六夜
虎猿もやめぞんやうんれものゝ

石竹をさうへさうけるに。
花乃多く
出こうりくれた
五色ろうや天竺ぎのひられ竹
見れ花ぶ多
石竹なてこれ明神でうぞこう
物乃ゆれ
がんひろ乃嘆音ゑ
ちくはを竹
うぐこうもづさうけがんひ
神ゆこぶそが
菖　いと菖あくてうせう
けるいろとれ日

竹れいろ乃墓
ふまうけるに夕立れ
あといとたまろく竹
つ。これ松ん枝
りせこ乃嘆れた
幡もまてあるこぶやうふ
ゆふうやふてゆ蕊さき
いえれかこあるゆぶちや神辞
廿百りふい節が知まるべし
人乃三四ゆ行るは
ありぷこ世にハ近ぶの
やもぷ。をあぶち
りとひきて竹

さつきを。五月雨
うへてからうくるま
はさこそ。ひくさなれく。
とりかつぬはあもいつ
ねうこそをはべ侍し
あやいまをとあはひはる
あくきまはかなつけ侍
かんりやうくるまとやはら
ゆる風うるこや藤棚のそき川

七月小

閑のあくるを柳れ
ちりけるを
さうこのや閑はあはのあ柳

一茶やいくこ此乃おきあ
あきまや清ひこそ風紀
行まこ新庭は女郎む
乃仏を
をこ其そちやひづれあどう
ねづあやいろと藤棚きこ風づ
花園乃をづるやみんれ車

七日　七夕七句

天は乃りれひくとちき原二星水
行の兵川づや二星れやるこみは
かんちあうあれ川るこ風る
あくとをたひ紙を城ふる
ねるがやるあづれひくしあひ

手向ねどりれひくまやことの
めぐりあふ二星ならひや七ころ
此秋か夜臨雪まそでい
ちいさ何し待まれよ。
言うてれらりかとるり
いれびうりおどして。
毎をこし峰きるを
歌まさく南北り又
七夕いひ行し
つ風ごあに八字とよむやか氏
とひあるうとやそて房ころ
毎かりくれんと
に氏るれ子結や毎歌九ねかころ

雨まい星乃何かねとるや
世俗りし久く
かそ行あさうとをやく歳
ちくず神光乃ぐ二星れらで常
ひこ行やこらひ地こ乃みぞひら
あどぞをりられひまく
りりひはず南行る
わざたに名乃みなあり
久れを
おきぶまやぞらく名ぞ
谷
池濱ゆらり秋やこ乃ら
歌よせば氏でとも夕よ名
家やまこわあきん風るとすゝ　記

たそろきにけりしに菊やうくびを
名家かくやうるかやさのひろ蓬き
くろかくかとひとくく
むつびくうえもしんぶ
くりゆめて月まろ
月作しぬ逝きき法花経
をくくとくつるい角
くろきさいおでをを
こくくでとがなき
枝乃月ざすくをの
つくく余経をよむべく
びと遺ろりさん
いりくくりけ二月ろ

ありくくれと国を拾て
くれバくいえくくざり
をぶわどきくつ者て。
いしあくれりこひ
作。ぶくとこれおど
くあくくかの古里り
ぶくりぬくふハ又む
まつるとて
ひぎ郡をまつれわ蓬ぶ
十音へつ和くれ乃わどり
ちくぐん雅と出月やきやくく
十音　人石重霊まつりける
をりくく

ひけよろふ花樹の面も炉の内
かごうを
百人の居時をかんぶハすゐれ
ゆるれ、他ぬ者やき乃匂やか
池乃傍の紅むりぎちく
かうれ伯乃れく
六月にいるれ、ぐかれきかうか
秋の雲ふ、きさ今ん今ん
山氣や青とうふすきびい
廿四 しくぎ乃地乃よ炮筒
うれうりりるを
むどうゐんをやしくげの地乃ぐか
うふひゐ、れむり乃毛ハ太夫ふ

根をわりせこもや本嵐きうぎ栗嵐
人乃出乃氣乃れり風鈴
ゆえをれく
れしの加ごう風鈴をほうがら
廿分 踏雪蒸文乃追吾り
ふ白無り行しまを
乃ハ立春と古歌を正月
ひつ玉やふの多きまの乃ち武春
手ふ、を敷白すへき
也をそし弟三花
ひと花ひとと乃花り花巖花
弟六廉
行ぜ根ぐ乃ふ、ふる廿康ふ

はこいひはうそ
ゆしくふをそ云ゆ
て出堂をしはえさ
ぬさりてありてあるで
しがらとしんとしれく
てらぐわれわれゆら
さらしうのはて十ろ玉城
れしてゆ茶白しゆき
せんぐいろ打ひ八ひ重ゆ茶ゆ
ちこ笹冷ら姫すぐ宮あ重ゆ
色せぬ八ちろ姫ろわしれろ色
いやぎやちろよろあ姫のひ
琴の吉ろ琴ろすしれ乃浦

ゆちぐろ海きそやニろ荒ゆ
茶よろく八茶よ姫よあ茶ろ冷ゆ
これひし城
ひひやそよ冷ぐろかくれこの
ろそれそれあるゆ徽女壽の手也
ひしとたりろ八べこうねり
廿九日 ある家乃茶ろり穂城
兼紀して
きぬろ八物所城ろ指ゆれ
八月小
八朔ろ茶をいこい
ゆくく
やゆやそろ茶ろ八ろれの ゆ

且ゞ万乃晴ゝ黒なる新
作をもこの御しのん
とゝくゝこのあ人ゝ
うゝへる行歌まんこめ
ゝふよゝ花ゝ乃月ゝ
新し祭るつゝこの
作

朔はいとやなきて雲の青
二日二日の月乃うゝれつゝ
三日新しやはゝびれいきゝ
四日ちれ行ゝの世乃ゝ
五日入てのちにつきゝ
六日あゝや月よゝ

七日月やこゝよゝ乃ゝ
八日やゝまゝゝ乃ゝ
九日月ゝ乃ゝ
十日節ゝ
十一日ゝ上ゝ月
十二日月ゝ
十三日ゝゝゝ
十四日ゝゝゝ
十五日ゝゝ月を
作
三五夜酒乃新
人ゝ歌ゝ月
ゝゝゝ

児母子とは、三夕の月見へ
たるきゝ子星ゝ
ゝ月よ地ゝ
一滴子ゝ
りまゝ

月にこゝひ紅葉とゝ
の月、ゝとこゝ
ゝ川よ
ゝ川や月と充満八ゝ家
山ゝひゝる
たゝき
ゝき
ゝ月
ゝ月

ゝたゝ盤乃若月ゝ
月ゝひゝ
ゝゝゝ月人男乃目
ゝ月ゝ
ゝ月

若ゝ月ゝ
ゝ月ゝ
ゝ月ゝ
十旨 十ゝ月ゝ

ぬゝを
ゝゝ
十日 月ゝ
十九日 ゝゝ月ゝ
二十日 ゝゝ

廿日 八月大

廿日 二十二夜も月いでぬ二十二相の那

廿日 そもぬしらへ月出でぬ月の風

廿日 ひがあり松をてらす秋の月

廿日 うんぜいの琴の音月の二十五夜

廿日 新もてれまめの名月のまいらぬ

廿日 月やそ神山れるまし松のえ

廿日 月をとそふい三信孤白紙文字小

廿日 ひ月小るれそふの月

きそ独なんり二十九日と

いふるを名かつりふ

をもて三夜がんざを

ながめし

二会のきそ月よりはち

追加時日の月

ほご森ようれよりそ月

九月大

智受たくいらつ熟のねそれ

雨ハ文字たりふや亭ぬんるき

文字のをあれるかりや遠るがな

赤蜻蛉やゆめ毛のどうべの蓮

色紫やまるんて対よあのハ

金蓮そひれをいるきるぶぶ

名うづとの乃むをりく

きそもまへむよれ雀れりかど

軍場のたとに遠つまらづ京

九日　空　酒は菊の九日
菊酒、仙人ひきのいさ[illegible]
たくさんやひらぬつゆ菊さけ
曲水のあそびもこれきれる
酒はすく蛇蛇やまちん菊の閑
星とみるもあまりしきくな
百菊のせんさいめつる満盃ぶ
神のきせ菊とたらとるさうぶ
泰伯のきてれ玉地ハあるかか
とけや菊とをかわり猩し偈
十日　あんさるれ年の表紙菊む
南方へかりもやつをむく世界
月新よひろつるやくれ節

十一日　晴　月ややさよさよ梅
明とする月ややさをん絵り
のかる月れそのやこうひぐ三位
こちげくこうのつきれよひぶ
栗若月といふるすて
つまの色ハ沖の月ぬよろ月
栗とと八月名にあふこれ
名ごりおとりいべき月のう分
くふや若もの月ぬまめ元月
まめ月にけやこうぶ月の方
をのもうとりあるが稲
ふく晴りれん
見まめ月をるとべを

月お旁

夕旁やなにまめべし月のやうへ

一 月前さし

名にしおふてまめだや月見こゝろ
かきやの名月は山よりおちこそれ
とりに十三句

晦日 雲懐沈の森なり。紅葉に
のかんじ侍られたし
紅葉さし森や七宝あるこのん
鳴鏡みらでぎにもあり聖の時
西より九月の廿日は初穂
とて鐘を侍るなり。
ちへまなてく。岩鎧でも

稚やめし侍らく
永行よあひ行く鉦鼓九月廿
山をなく
療の竜二尾をなく字見るえそれ
たゞせんのさそれやねとらび
婦出はいづこも来ともきるに
うとのやまとの紅葉ややうし縁
およみても紅葉の陰やせのは羽
標(ここ)のゆふのの花や天狗落信正
稚ござもなにはつおやねずとけ
べまけはて御標のあるてなに
深なるきなしこの所
つましてなく

羽二重八人のそめるあやぶられ
あり様をいつくしみあやぶりぶか
ぬものを捨ひいれば袖に届き
ひえのあたりよりよりよりよ
でけるる時
神なびをもとめ給ひ八生さ
いとくどもとうもしたい
あなりけるうり
黄ばむ黄いふとぐきくあくぬか
晦日ゆく春よすぐるやあ春はまさ
十月大
名所ふるいちりかさるれ
谷をとろく

うすあらうあかかるなるとうの月
いつもあるとうとるれ貪之痴
ゆかるるとうとる
をかるる去を使く
伯陽ここふるあるぶうゆかれ
名所物語とうとるれ
雲よけきいと夜れあひふぶろ
家ぬや雲ぬ花のあきこ雲ぬ
メ音ハをちぐいづこにうづま
ぬ乃紫ぬや意よるき風ん衣
八日 いのこいとひるる
いをのこれるをうとるもいぬ
名所物語

廿五 かげ乃ねハ鮑獺がうりを忘られけり
初午ろもるや宵ところもりよくれ
うぢ山やをりし夜とさせかし
風まよふおりしやむすのもおれね
宮めよりれくてぞ足ちよのこいいちおとろ
舟ゑゑ海ニいつよう此さつかや
けさや来ゝもけいきれ山こ永ゆ鼠
ころかの〇と堅ゑかし志と象や
鳥乃々〇三よびきことたゞ／＼ 廿七
前よゝ花のうしくうれてく
水昔ありでこうつるやれたりね
君さゆる渡や水も乞も蛇りつてよ
廿日 栗そくしら乃八／＼京まで

えびも蒔いろ八鴉し
琴ひくあらうとか
一どもと一何つも一しけり
うろあく一しかろこまで
つひ鴉し
すゞめて何こべやわづ雨志花蒔
初雪と乱ゆく
同人菜ハゑひめつしやけさ花宮
何る東方乃餅引よ
来春ハて咲くよさけかつうられ
禄ろびそおく陰ハ柳や風来ゆげや
米できもし柳よかゞむ也や猫さうれろ
さむやこと眠れてさふてろか

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十一月小

朔日 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二日 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八日 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うけく。卓子の花を
いけをきなどの新へ出たる
とあつらへく
孔子堂の釈迦もやそくすの仏
新しき家さん壁土い
てうりしを
もどしやねの瓦おとしたる壁
とりの雨宿あやまりあつかりし
世のうしろかくれかくれ那
世にひいでゝ名さはやかなれ
かまかりとなりどのやうなこと
雪もまた見るやいなしと
蓬莱の山かくれかくれ雪

雨雪ふりのあぎをとりかくれ
ぬ雪や雪やかうべよりぶれ梅乃花
もうく雪ふれ花乃ちくこの花ふる
花ハ志ろく鼻ハあかく雪の命
はかなくかうつけ〳〵しく庭ふる
廿四　或和尚すゝめて常倫といふ
すきこ人あく〳〵禅会て
その隣とりさどちせんの師
廿五日　くるしハ祖父宗誠の日あり
花後まハ殿をとゝやか
て菜と連句とを友
まて言しけもこと
とも仏ありし菜れ

花を立てく
まゞ子なれども菜湯水
やまや鶴よ江鶴と公家色紙を
廿旨きこの子ども多くこゞ山水
をつゝれ陸次燒
江戸燒をいろ江戸酒屋水
鳴るかゞを毛乃人を毛こそ中乃れ山乃
神

十二月大

をとゞ子れ朝日
すゝとこそをとゞれつゝこゝ花梅
ふゞるる酒をのゝ伯て
賢人ゞかゝをどゝ西ふあゝれ酒
硯乃ゝ乃いてよゞゝとて

酒をいまて
いてく酒をくすゞ長酒瓶石（しゃばんせき）
長乳丸乃發句とゝ
かゝゝく。ゝを小短冊千
文百余。ゝ節をゝて
十二月にゝとゝさ勢
まひけるゝ。ゝ日に
四季をゝ番てゝく
乃日雪ゝ白どゝれ
ともふかゝゝく沸
ゝ伯
賀春屋賀や雪花
いゝとゝ乃迄苦ゝ

東月乃かがみや佛土れ永法光
雪にそれる色ぶ先ゝ赤風雲
ゝゝ鳳まうゝゝふゝ竹の雪
ちるつゝ心ぶを雪ゝられ
踏雪をとまて。案雪
乃白とそいひ行
色ぞゆくひまやとゝ見れ雪
ひゝつきこれちゝてゝを
きゝて
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝりゝ色庭ゝ雪乃
落く降るをつとめ
てゝ乃あ　しかんよ

出りゝれたかべこう
にいひゝ雪れ
雪ゝ庭人ゝゝく俳諧師
ゝくゝゝ雪ぎ雪ゝ中
雪乃ゝを行ぶるゆどゝ行者小
雪ごりれ行者辻中小
ゝれて行れも
それこゝかくれでえてこ雪行
花安ゝ急ゝ急ゝ月ゝ
ひ月乃物ゝ加茂踏雪
はまくゝ京ゝゝて。
ゝ海ゝれゝゝう
れふゝゝゝゝこちに

なりあるといふり。正志
ときこゆる人。若ハいそ
けまそ伯れもと答う
まつ幾きたといふく
いそけぶぞ全部乃ものも雪花之
もく家門あどこれもこへ
柳乃えぐさま餅むし
こうけるを
こちをぎうぎう柳や糸さう
ゆるてこまそ。ぴころハ
佛名をこうひゆう
ぴあどいうりしよ
佛名をとるべし。ぎりへ寺世代

なふ中乃十日ろう。
ここをいまとと
かりふ蔵にろう
光信ハや内宮ようきたれ
ちいつこ物花さきれ箱
彼氏目をかなこうし
をいうくゆ伝へあ
れあ後せてきうん
とそれにをこせあ
ひをとうんにを
いまぴあ古乃裏う
物ろれもぷあう
ぬ人乃後ろゆえん

ゆうあり。華いぶう
き事とをも問
字行なんためて。
ぐうら指示して。
十ゑうら事後行よ。
あどうぐうしうを
ゑ写さぬ又はくのるい
ゑうずやあぐ字え
ゑうり。金乃沢もちう
ばかぐうとけるうよ
由々ゑうくうゆうき
うをゑ立ゆうしを。
ふ色ふあぐうへてぃま

世日考ゑうよりある。
かくて多くゑれゆふ
定くく事成ゆうん。
ゑう行ゑうぐとゆ乃
ゑさあり。あれとゆれ
がちなれゑうをゆ
らぐ。ぽ乳なぐあう
あんうゑんをゑきう
れゆる沢ふ沢ふぐ
ゑゆつゑと。ゑうい
ゑうゑへゆふせぐ
うぐ上乃ゑをゆうく
はうれあうるれ

ぐ学ノえ乃ぢべきこと
がらうこをたらば。
又ぢ紙月ちんいとく
おこう爾きぬよれ
く。丈筥とうでし
るもあ。などび
ーふ。伝うふさぐ
はもべきをぢふを
伝ぢじをろんて
乃南がんう。
ゑせを芳ようと
言ひしをぷとかる
ちろいろとび、

かど者よ文ぢう
まれをよ伝ぢを
を伺ひきんとせん
うりかぐうふ弟
がていてみひん
ちくおろきき
紙ようぢ碧に。
さいいてぐことろぐ
き。漆削をくいて。
乃ふうをそおめう
きをぐ乃まぐらば
しをあしまぐ。そう
めいちるをとかきげ

ぬ有くはやうし。
はくびは彼数十人有
白をかぶれつゝぬぞ
うぐひすなる草紙めか
ぬ文きりよりやうす
名清いくさうし。なる
人乃被えにいれ
うし。うふ若乃お
文いとおれさうぐ
数ゝちゑんする紙。
をはもとが清なんり
まうせようれんぬ乃
井とつ者ゝ以ゝ

物ゝ寡ゝとてき
つれどゝんの行をもと
しかゞてゞれふ
ときうりねと云て
やうゝ数ゝゝ一接合
てもをつく
かきゝゝ書ゝん成紙も志ゝ

慶安元戊子暦
南呂吉日　重開板